



福井大学教育学部附属
義務教育学校

No.08

平成31年3月12日

学校だより

卒業に思いを寄せて

後期課程 卒業式 学校長式辞より

本日は、ご多用の中、中田副学長をはじめ多数のご来賓の皆様のご臨席を賜り、ここに第56回卒業証書授与式を挙げてまいりましたことを大変嬉しく思います。高いところから大変失礼とは存じますが、卒業生、教職員とともに厚くお礼申し上げます。

また、お子様の晴れ姿を前にされて、ご列席の保護者の皆様の感慨もまたひとしおのことと存じます。お子様のご卒業、誠にありがとうございます。

そして、卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

私は先ほど皆さん一人一人に卒業証書をお渡ししました。皆さんの中には、3年前の附属小学校の卒業式で私から卒業証書を受け取った人もたくさんいます。修学旅行などにも同行していましたので、私としても何とも不思議な縁を感じているところです。

それはさておき、皆さんが手にしている卒業証書は、皆さんの努力はもちろんのこと、皆さんの成長を支えていただいた、ご家族の深い愛情そして先生方の教えの賜だと思えます。このことを深く心に刻んでいただきたいと思います。

皆さんは、本日をもって住み慣れたこの学び舎を後にし、それぞれの新たな路に旅立ちます。そこでは、これまで以上に主体的に学び続ける力が求められます。人の後についていくのではなく、自分自身の目標を明確にし、その実現に向けて困難を乗り越えて努力する力を身につけることが必要となります。

先日発行された育友会の「なわて」の中、卒業生に贈る言葉として、私は上杉鷹山の言葉を選びました。それは、「為せば成る 為さねば成らぬ何事も 成らぬは人の為さぬなりけり」というものです。

これは、「いかなる事でも強い意志を持ってやれば、必ず成就する、結果が得られないのは、成し遂げようという意思をもって行動しないからだ」という意味です。私は、この言葉を子どものころから聞かされてきました。いわば、福井における橋本左内の「啓発録」に近いものがあります。日本では、上杉鷹山の名を知らない人も多いと思いますが、元アメリカ大統領のジョン・F・ケネディやビル・クリントンが、日本人の政治家の中で一番尊敬している人物として、上杉鷹山の名を挙げています。

上杉鷹山は、もともと日向高鍋藩・秋月家(宮崎)の出自ですが、1767年に血縁関係があった米沢上杉藩に、弱冠十七歳で九代目藩主として迎えられました(上杉謙信が初代藩主)。鷹山は、莫大な財政赤字をかかえて窮地に陥っていた米沢藩で、対抗勢力に立ち向かいながらも家臣と協力して行政改革を進めました。自らも質素儉約を旨とし、新しい産業の振興と藩校の設立



による人材育成を実行し、藩の財政再建のみならず、領民の生活を建て直した名君と謳われています。改革は莫大な借金を背負った状態の出発で、立ち直りかけても大飢饉が襲ってきて、それまでの努力が水の泡となることもありました。鷹山はうまくいかなかった原因を探求し、どんな困難に直面しても決して諦めず、少しずつ障壁を除去していったと伝えられています。

ところで、1月末の学年便りで、私がグリット(やり抜く力)について触れたことを皆さんは覚えているでしょうか。GRITという言葉は、ガッツのG、レジリエンス(回復力)のR、イニシアティブのI、タナサティ(粘り強さ)のTを集めた言葉で、長期的な目標と情熱をもち、どんな困難があっても、それを達成するまで諦めないという力です。グリットの意味を示したのは、ペンシルバニア大学のアンジェラ・ダックワース教授です。彼女たちの膨大な調査研究から、知能や学力、外観、健康という資質よりも、グリット(「情熱」と「粘り」と強さ)をもつ人々が様々な分野で成果を挙げていることが明らかになりました。

ダックワース教授は、グリットを先天的なものではなく、努力次第で育むことのできる後天的なものだとしています。養育環境や親子関係などの要因もありますが、グリットの高い人は、ポジティブな考え方をする傾向があり、仮に失敗しても、これまで乗り越えてきた過去の経験に裏付けられた「自分ならできる」という自信や信念があるといいます。グリットの高い集団の中に身を置くこと、すなわちグリットの高いメンターあるいは同僚が身近にいて刺激を与えることも、グリットを高めるのに有効だと言われています。

上杉鷹山についても、前述の「為せば成る」の言葉通り、グリットの高い人物であったことがわかります。実は、鷹山は14歳から17歳まで、細井平洲という儒学者に師事して学問を学び、その後細井平洲は生涯にわたって鷹山のメンターの役割を果たしていました。

さて、卒業生の皆さんのグリットはどうでしょうか……。この後期課程の3年間で取り組んできた学年プロジェクトや、体育祭・文化祭をはじめとする行事、クラブ活動、生徒会活動などを通して、皆さんのグリットは着実にレベルアップしていると私は思っています。皆さんはこれらの活動を主体的に、粘り強く運営してきたことと思います。この学校では、教師の介入を極力控え、生徒の主体性を重視する校風・学校文化がありますが、実は皆さんのグリットを高める仕掛けでもあった訳です。ですから、皆さんは自信をもって、これからの新しい路への一歩を歩み出してください。そして、これが私からの卒業生の皆さんに贈る「為せば成る」というメッセージの真意だと理解してくれたら嬉しく思います。奇しくも本日は8年前に東北の地が大震災に見舞われた日でもあります。被災した方々も、苦難を乗り越え、「為せば成る」の精神で復興に励んでこられたのだろうと推察する次第です。

最後になりましたが、ご列席の保護者の皆様、あらためましてお子様のご卒業おめでとうございます。皆様には、3年間の育友会活動をはじめ、本校に寄せられましたご理解とご支援に深く感謝申し上げますとともに、卒業生の前途を祝し、さらなる成長を心から祈念して本日の式辞といたします。

平成31年3月11日

福井大学教育学部附属義務教育学校
校長 大山 利夫

編集後記 9年生に対する言葉というだけでなく、本校の最終的にめざす姿を表していると思ひ、在校生や保護者の皆様と共有いたします。附属義務教育学校としてのグリットが、次年度に向けさらに高まっていくよう努力して参ります。 ー後期課程教頭ー